

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その3 —

日・緬（ミャンマー）連合の西挺身隊（カチン州）

高松重信・著



サガインヒルとエーヤワディー川（日本将兵はこの地を通してカチンに進軍した。2006.2.27 筆者撮影）



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 / 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞って勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



はじめに

国民的作家である司馬遼太郎氏は1968年（昭和43年）から4年の歳月をかけて長編大作『坂之上の雲』を著作された。

私は司馬さんのこのノンフィクション小説を過去に暗記するほど拝読した。司馬さんが主張したいのは、明治以降、『日本人の世界観を抱いた人としての規範、即ち倫理観』が小さく且つ貧しくなっている事に対する警鐘をならしているのではないかと感じた。

そして司馬さんは日本人のこの倫理観を次のように話されている。日本の近代史、幕末から明治時代は世界史のなかでも例をみないほど特異に発展し、それがアジアで唯一の独立国を堅持したと言って差支えがない。

この原因が我々日本人の倫理観である『名こそ惜しけれ』『公に奉ずる』に起因している。また、この倫理観が、世界でも殆ど類例がない。戦後の驚異的な復興、阪神淡路大震災および東日本大震災時に見られた節度ある行動などにも起因していると述べておられていた。



司馬さんの著書（坂の上の雲の主人公、兄の秋山好古と弟の真之）

20世紀は工業・化学・医学などが誠に大きく発展した時代であったが、反面、人類史上、稀にみる悲惨な戦争による犠牲、環境破壊などを惹起した。つまり、社会がラグビーのボールの如く歪んだ様態で発展形成された。この負の歪の正体は詳細説明を省略するが、『公共に対する倫理観』の失墜ないし未醸成であると判断される。21世紀後半の一つの重要事はこの歪を是正改革することであると思う。私は今回、この観点で以下の拙文を記述させて頂いている。

● 日本の成長戦略

我われ戦時中生まれの者は戦後の小学校教育において、我が国の国土面積は世界62番目の約357,000km²であり、その内75%が山地で占める平野の少ない誠に小さな国家であって、且つ、資源および内需が僅少な貿易立国であるから、諸君は海外で活躍できる人材になれと、先生から教えられていた。

しかし、現在の日本貿易(外需)依存度は2015年首のGDP比で11.4%であり、G20(Group of Twenty)の中で18番目、先進国で我が国より貿易依存度が低いのは米国のみである。

◇輸出のGDPに占める割合◇

国名	貿易(輸出)依存度 (%)	
	2006年	2015年首
米 国	7.9	7.5
日 本	14.8	11.4
英 国	18.7	—
ロシア	—	24.4
中 国	36.6	24.5
ドイツ	38.7	33.6
韓 国	36.7	44.4
シンガポール	205.8	—

◇輸入のGDPに占める割合◇

国名	輸入依存度 (%)
	2015年首
日 本	10.8
米 国	11.4
カナダ	24.6
ドイツ	28.0
韓 国	38.8

上表から我が国は2015年首で内需がGDP比で約88%であり、外需に頼る貿易立国ではない。輸出、輸入のバランスも一応とれている良好な状態と言えるかも知れない。

しかし、日本の輸出依存度はロシア、中国、ドイツ、韓国の半分以下であって、我が国が今以上の経済成長を得るためには輸出をより強化しなければならない。

ここで現在、国会で審議されているTPPに少々言及すれば、メリットとデメリットもあるが、もし、仮にこれが有効に運用実施されれば輸出入の拡大の可能性もあるであろう。海外移転が進んでいる我が国にあっては国内回帰で輸出が拡大できれば、国内市場の活性化と輸出の両方に効果を得る可能性が考えられる。

経済に知見がない私ではあるが、戦後日本が築いてきた平和と共存を旗印にした外交方針の基で国際貢献と海外市場への事業展開を図り、各国との共生を醸成できる正常な貿易立国をめざさねばならないと考える。この中で経済成長しながら我が国の高齢化、人口減少などの諸問題を解決し21世紀のあるべき我が国を造らねばならない。

このためには、日本人は海外に通用する人材を育成し海外で正々堂々と活動しなければならない。その人材醸成の重要な要素が『公共に対する世界観を抱いた倫理観』であると思う。

今回、先の大戦で当時のビルマ（現ミャンマー）のカチン州北部に位置し、人類未踏の秘境地フーコンの地で、現地人と我が国の少数人数の騎兵が共同し挺身隊を結成し、英、印、中（蒋介石軍）軍と至る所で戦い、実質的には勝利を得ていた集団が存在していた。その名は【西挺身隊】といわれていた。

この【西挺身隊】は誠に小さな集団であり、殆ど日本人には知られていない存在であったが、当時ビルマ辺境の地で日（日本）・緬（ビルマ）の兵士が生死の犠牲をも厭わず、ビルマの地を縦横無尽に終戦の日まで敵軍と戦ったのである。この日・緬共同の挺身隊の航跡は我々に何がしか海外展開への道標をしめしてくれるのではないかと思ひ、以下にその史実を記述致したい。

西正義大尉

西大尉は1918年（大正7年）3月30日、福岡県福岡市で生まれた。1935年3月福岡中学卒業、1938年3月福岡高商卒業、同年4月日本国有鉄道門司鉄道管理局へ入職。1938年12月久留米騎兵12連隊へ入隊。1939年10月甲種幹部候補生、1940年11月南支廣東（陸軍少尉）。

1942年6月ビルマ、タウンジー（陸軍中尉）。同年12月西機関創設。

1945年8月ビルマ、チャイト（陸軍大尉）。復員後、サンエイポス及びサンエイフーズ株式会社を創立し、代表取締役及び会長。



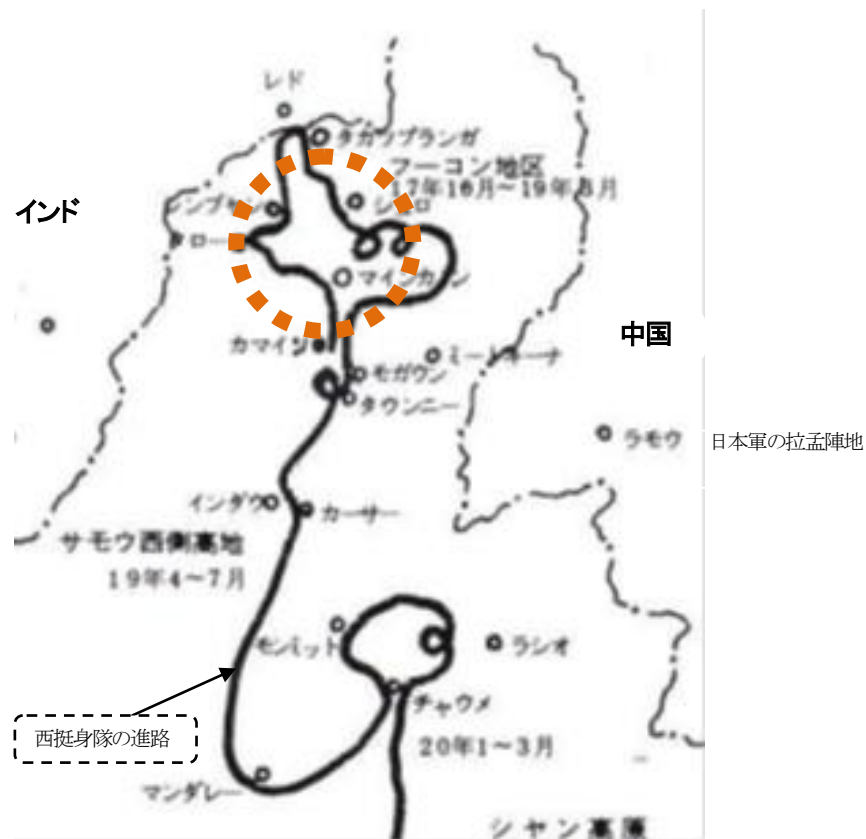
1940年11月馬上の西少尉

フーコン地区

フーコン地区とはミャンマー（旧ビルマ）北部、カチン州にありインドと国境を接しチンドウィン川の源となっている。

チンドウィン川とはチン族の国から流れてきた川と言う意味。

同地区は凡そ長野県の面積でミャンマー・インド国境のフーコン側山麓のシンブヤン～鉄道沿線モガウンまで、直線距離は約16kmであり、面積が約14,500km²である。



フーコン地区

フーコンとは“死の谷”を意味しており、戦争の当時、悪疫瘴癘（しょうれい）の巣窟で、赤痢、コレラ、マラリヤ、ビルマ発疹が流行し、人が住めるところではなかった。現地人もフーコンを恐れ、滅多に踏み入れない地方であった。

従って、現在に至っても未発見の希少な動植物も存在していると言われている。

2006年にはここで産出されたコハクから、これまでで最古のハチの化石が発見された。Melittosphex burmensisとの学名が与えられたこのハチは白亜紀中期、約1億年前のものとされている。

フーコン渓谷はコハクや金の産地としても知られる。コハクについては古くから知られており、その採掘の歴史は長い。一方、金が注目されるようになったのは比較

的最近であり、現在のフーコン溪谷は一種の「ゴールド・ラッシュ」である。溪谷を囲む山系の斜面は、豊富な雨量（夏の雨季に集中するが）に恵まれて深い森林地帯となっていた。特にチーク材は古くから利用されてきたが、最近になってその伐採が著しく進んだ。そのため、各種生物の生息環境が急速に悪化し、とりわけトラ生息数が激減して現在では 100頭未満と推定される状況になり絶滅の危機に瀕している。

現在もこの地方にはカチン独立機構（KIO）が指揮下にカチン独立軍（KIA）を組織した少数民族の軍隊が存在し、主要都市と鉄道回廊を別とすれば、カチン州は1960年代中頃から1994年まで事実上独立状態となり、経済は密輸・中国との翡翠貿易・麻薬で成り立っていた。1994年にミャンマー軍が攻撃して翡翠鉱山を制圧後、平和条約が締結され、ミャンマー軍の庇護のもと、KIOは州の大半の実効支配が許されている。この停戦は、直ちにKIOやKIAによるミャンマー軍事政権との偽和平合意に反対する数多くの分派の形成という結果をもたらし、その後の政治的状況は非常に不安定な状態に置かれている。2011年、KIAとミャンマー軍の武力衝突が再開。2011年の6月から9月にかけて1,397世帯から計5,580人の国内避難民が発生し、カチン州のミャンマー政府管理地域の避難キャンプ（Je Yang Hka Internally displaced peoples camp）に收容されている。2013年には、再び停戦の合意がなされている。

フーコンの戦略的価値

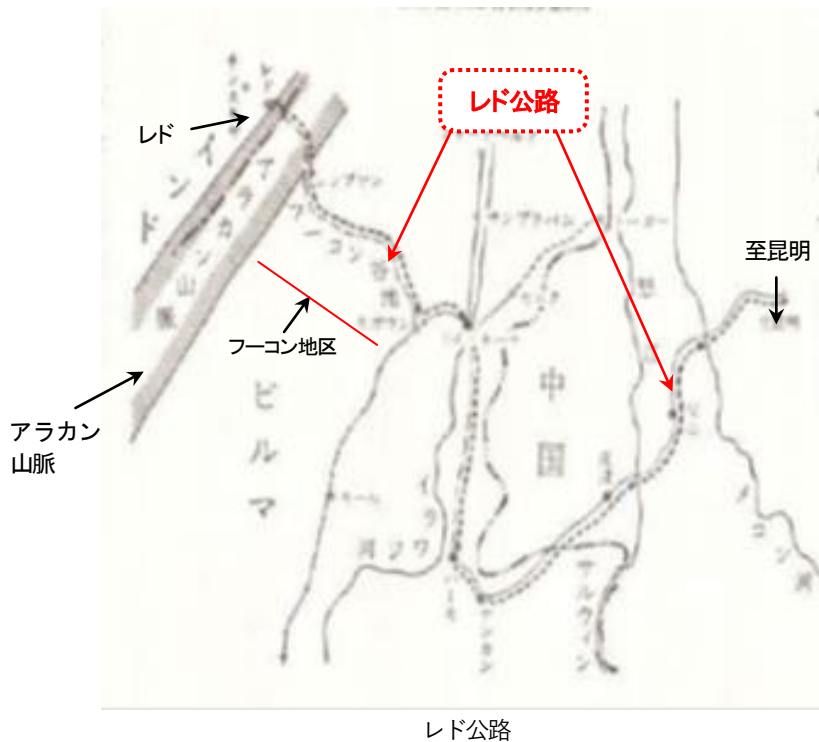
先の大戦中、我が国のビルマ（現ミャンマー）戦略目的は次の三つであった。

- （1）我が国は当時、中国と戦火を交えており、大戦以前から米英などはビルマ・ラングーン（現ヤンゴン）からマンダレーを通り、昆明を經由して国民党軍（蒋介石）の重慶へ物資を搬送していた。この援蒋ルート遮断のためにビルマへ進軍した。
- （2）ビルマを英国の植民地から解放し大東亜共栄圏確立を確立させ、我が国とアジア諸国の共生を図り、我が国将来の存立をより確かにする。

※大東亜共栄圏：Greater East Asia Co-prosperity Sphere＝植民地を解放し共存共栄の国際秩序建設。

- （3）当時の我国の絶対防衛圏の西端をビルマにおく。

連合軍は、ビルマ・ラングーンから中国への輸送道が遮断されたため、シンガポール陥落後の1942年（昭和17年）3月には、早くもインドのレドからビルマのフーコンを通して中国雲南省の昆明に至るレド公路を建設する計画を作成し、反攻作戦、即ちフーコン作戦の体制を整えようとした。



この公路から英・印軍と米軍式装備に改編した中国軍（蒋介石軍）により大反攻をおこすと共に、中国大陸から米軍B29戦略爆撃機による日本本土への攻撃を行い、日本を降伏させる構想を考えた。

米ルーズベルト大統領は、フーゴン作戦で、十数万の米英、支（中国）連合軍を指揮するスチュール将軍に作戦遂行の権限を与え、「レド公路開通は全ビルマ奪回より重要である」と言明した。この時期、日本軍はビルマに進撃中であり、まだ、ラングーン（現ヤンゴン）も陥落していない時期であった。

このように連合軍は大反攻作戦をフーゴンからと決定していたが、日本軍はそれを見抜けず、あの悲惨なインパール作戦を実施してしまった。

しかも、1943年（昭和18年）3月この地区の守備に就いていた日本最強であった第18師団（菊兵团）の28,000人から13,000人を武器・弾薬及び輜重連隊（輸送）の一部も含めて他に転用させてしまった。残念ながら、ビルマに於ける日本軍司令部は戦略間違いの愚を為し、主戦場を見間違い、兵力分散をさせてしまった。

これにより、菊兵团の兵力が激減し、55連隊（大村）、と56連隊（久留米）の約15,000人になってしまった。しかし精強なこれら日本軍は兵力数十倍の敵軍に対し苦戦を強いられたが、勇戦に勇戦を重ね、敵に約32,000人の戦死、捕虜約7,800人、不明約400人。合計約40,200人の損害を与えたが、日本軍は約3,200人の戦死者と約1,800人の戦病死者、合計約5,000人を戦病死させた。

西挺身隊とは

西挺身隊とはビルマに於ける第18師団騎兵第22大隊、第二中隊の学徒出身である西正義中尉が指揮する「騎兵挺身将校斥候（偵察）」がその起源である。1942年10月、日米が南太平洋で死闘を繰り返していたころ、日本陸軍第18師団はビルマ東部のシャン高原にあった。



西騎兵小隊。先頭は西騎兵中尉

日本騎兵22大隊はインド進行の先遣部隊として、北ビルマの西北端の地フーコンの玄関口にあたる町、カマインを目指して進軍中であつた。（4頁のフーコン地区地図参照）

このおり、司令部から「フーコンのジャングル奥深く進入し、敵情報を探索せよ」との命令によって西騎兵小隊がフーコンへ進撃した。師団司令部は遠く離れて行動するこの挺身部隊に隊長の名をとって、西機関（以後、西挺身隊と称する）と呼称した、後に変更されるが、当初の任務は次の通りであつた。

- （1）北部インド・ビルマ国境の敵情探索【探索に伴う交戦も含む】
- （2）インド・レドからフーコン経由中国の昆明に至るビルマ反撃路（蒋介石への援助新ルート）工事進捗情報
- （3）フーコン地区の治安維持（近接する敵軍との戦闘も含む）
- （4）インド、中国・昆明を結ぶ航空情報
- （5）フーコン現地人の協力によるカマイン～マイカン自動車道路整備
- （6）その他、最前線における接触部隊の役割（戦闘も含む）

当時、南方アジア大陸に於いて、連合軍と接触していたのはフーコン地区の西挺身隊だけであつた。マイカン西北約90kmにあるインド・ビルマ国境アラカン山脈中には敵の前進陣地があり、約一個中隊（200人）が駐屯し、フーコン地方に小部隊、偵

察部隊を派遣し日本軍の進撃を警戒していた。

また、マイカン東方山地クモン山系約40Kmには、カチン遊撃隊を指揮する英、インド諜報部隊と小兵力を置いて、フーコン地区とミートキーナ（現ミッチーナ）方面の進出を狙っていた。

1943年（昭和18年）4月、軍の組織変えによって、西挺身隊はフーコンへ進出した歩兵56連隊に転属となった。師団直轄の二足の草鞋になったが、以来終戦まで西挺身隊は西中尉を長として、騎兵隊の優秀な下士官を主体として編成され、兵力損耗があれば、第18師団から選別された下士官を優先的に補充された。また、時として、将校を長とした有力部隊が西挺身隊に配属されることもあった。



日本軍の擲弾筒（てきだんとう）

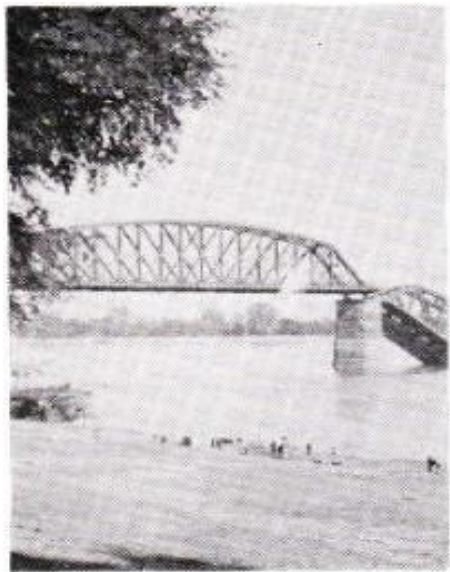
通常兵力は無線機をもった日本兵約20人およびビルマ兵約80人とフーコン地区のカチン兵とシャン兵約50名であった。兵力は凡そ中隊規模であった。日（日本）・緬（ビルマ）混合の西挺身隊は情報収集、宣伝の他、当初の任務に加えて戦況の変化により、攻撃、防御などの任務も多く担った。しかし、師団本部から西挺身隊への兵力増強が困難なので、現地人の志願兵を募集、訓練を行い、暫時、増強していった。西挺身隊の兵器も被服も事前に準備しており、武器・弾薬の殆どは敵から鹵獲（ろかく）していた。自前の兵器は擲弾筒（*てきだんとう）の火砲であり、威力を発揮した。戦場では無用の軍刀を捨て、日本兵は鹵獲した武力に優れた敵の自動小銃を携行していた。*手榴弾ほどの大きさの破裂弾（爆弾）を射出するための筒状の兵器である。

部隊主力は無線機を持って行動し、常時一箇所に集結していなく、二、三名の日本軍下士官又は隊長一人に現地兵10人から20名くらいに分かれて行動していた。日本兵は皆ビルマ語の会話ができるようになっていった。西挺身隊は終戦まで、軍命に束縛されず、自由な判断で行動できた。

現地人との信頼と日・緬挺身隊の結成

● フーコン地区の人々との信頼醸成

1942年（昭和17年）10月、フーコンのカマインで必要な現地人通訳を雇用し、広大なイラワジ川（サガイン）に架橋されていたが、今や爆破されているアバの鉄橋の渡河点状況、馬の長距離鉄道輸送および空襲の有無を確認するために、西隊長はマンドラレーへ単属先行し偵察を行なった。



破壊されたアバの鉄橋

その数十日後、日本兵のみの西騎兵小隊は準備を整え、濃い朝霧がたちこめるフーコンの入り口の町、カマインに入った。11月下旬、西隊長は部隊長からフーコン地区の中心地、マインカンの占領を命じられた。そこで、騎兵小隊は準備し緊張しながらも勇躍して、一度入ると二度と帰れないと言われる魔境フーコンに入った。虎や山蛭と倒木に悩まされながら進軍した。

三日目には例の如く、深い霧の中を進みワローバン部落に差し掛かるとき、頭髪を後ろに編んだ敵グルカ兵に突然であった。双方は吃驚仰天した。日本兵は髪の毛が逆立った。敵グルカ兵は化石のように突っ立ってしまった。敵、味方とも一列縦隊での行軍中に突発した出来事で、日本軍の横腹に英・インド軍がぶつかった格好の冷汗三斗の失点を経験した。

しかし、この衝突により敵軍は、結局フーコンの平地に出撃せず、再びクモン山中に引き返してしまった。その日の午後、英軍のホーカーハリケーン戦闘機12機が目指していたマインカンを見ると、凄まじい銃爆撃を受けた。西騎兵小隊のマインカン進入を狙っての空襲である。住民は事前に避難していたので現地人の被害は皆無で

あった。フーコン地区の住民意は英軍などから徹底して、反日教育を受けていたので、今回の爆撃は現地人により英軍に日本軍騎兵小隊のマイカン進入を知らされていた結果であると判断した。



グルカ兵

1942年（昭和17年）12月1日夜、招待していたフーコンのマインカン、ラバイ、ラロン土侯およびカチン族など総勢約80名が松明を点滅させながらやってきた。英軍の反日思想を吹き込まれていた彼らは、決して、西隊長が腰を下ろしていたバンガローに入って来なかった。

西隊長（中尉）は心中不安であったが、次のように話した。

- ① 「私はフーコンの司令官である。日本軍はビルマ独立のためにやってきた。ここからインドへも攻め込む」。
- ② また「多くの日本軍が来るために、先ずマインカンまでの自動車道路を速やかに開通させたい。明日からこのために各土侯は、出来るだけ多くの部落民を連れてきて、工事に協力して欲しい」。
- ③ 「賃金として、欲しい物を差し上げる。工事に参加した者には日本軍の良民証を与える」。この良民証が結果的に大きな効果となり、数百名の原住民及びカチン族が自動車道路開通工事に参加してくれた。

ビルマでは習慣として、訪問者に食事と宿を与える。この習慣は未開のフーコンの方が強いと知っていたから、西隊長は「土侯達に、遠慮せず、気軽に飯でも食ってくれ」と米、牛缶、塩干物、塩、砂糖、茶、たばこを分かち与えた。

彼らの動きは早く、さっと散ると、多くの青竹で水を汲んできて、それで飯を炊き、お湯を沸かし、青竹のコップでお茶を飲んだ。

英軍は決して現地人と共に食事をしないが、西小隊の将兵は隊長以下、彼らとともに食事をしたので、非常に喜び親近感を抱くようになった。牛缶、砂糖、塩、たばこは土産としてもって帰るようであった。

しかし、英軍による反日教育を受けている彼らは、この食事会で一応安心をしたようであるが、未だ油断がならない心境であった。さらに日本軍には軍医がいるから、病人がおれば、明晩ここに連れて来れば治療すると言ったところ、英軍によるあの反日的なカチン族が大きなよめきと歓声をあげた。

見つかると殺されるという英軍の宣伝とは大違いであり、英軍を追い払った日本軍は強く、聞くと見るとは大違いであると受け止めたようであった。このように最初のカチン族との接触は無事大成功した。

このフーコンでは日本軍の軍票は通用しない。物々交換が主体である。むしろ必要な物は阿片である。カチン族ほとんどの者が阿片喫煙者であって、重要な行為の代償は殆どが阿片で決済されており、英軍もそれを供与していた。そこで西隊長は騎兵本部へ英銀貨だけでなく、「阿片を多量に直ぐ送れと」打電した。

以後、次第にフーコンの土侯などは日本軍と親しくなっていた。当初は英軍に味方していた土侯ウ・ザー・ドン・オンの長男のコ・サン・ニエンが、日本軍に協力してくれるようになった。彼は28歳で、とても優秀な男で、インテリでもあって、1944年12月までシャン一族を率いてフーコン作戦および菊兵団の撤退作戦、カサー、イラワジ河畔まで、我々に同行して誠心誠意、日本軍に協力してくれた。



カチン族の高床式民家

今まで敵側であった土侯長男の敵情報説明は明快であった。日本軍と対峙している英軍第一線陣地が、アラカン山脈のハカラッガとブランガであって英・印軍の兵力それぞれ100人内外が常駐しており、その上に中国軍が徐々に増強されている。その他、近在の敵軍勢力配置および人数と活動状況が判明した。

1942年12月中旬、第18師団騎兵挺身隊は、騎兵隊の指揮を離れ師団直轄部隊となり、現地フーコンに於いて新任務に就いた。主任務はビルマ北辺の接触部隊としての任務になり、部隊名を日・緬合同の「西機関＝西挺身隊」と命名された。

早速、身軽に行動するために乗馬の後送を騎兵本部へ意見具申し直ちに許可になった。

自動車道路の完成が間近になったので、騎兵部隊長の長橋中佐をマイカンに来てもらい、フーコン地帯の全土侯をマイカンに招聘し、今後の日・緬双方のより固い団結を図る一大決起大会を企画した。そしてその日に集まるよう、土侯長男のコ・サン・ニエンに指示した。騎兵連隊へ大会に必要なあらゆる物資、宣撫物資と阿片を何回も頼み込んだ。

会場にフーコン地区の全土侯9人も集まり、総勢400人くらい。長橋騎兵連隊長（中佐）を師団長将軍と称し、西隊長（中尉）をマイカン司令官と仮称し紹介したところ、土侯達は、つぎつぎに貢物を持って、二人の前に土下座する。それら貢物の中には人の身長を超える象牙があった。この巨大な象牙は世界でも一、二を争うほどの大きさであった。また、虎の頭がついた一枚皮もあった。日本軍からは土侯達に、ビルマ被服、布地、糸、針などのほか、キニーネなどの医薬品、塩、砂糖、お茶、缶詰、たばこ、また、当時珍しく豪華な大本営発行の日本陸海軍の威容を誇示するカラー写真も贈った。

全員の食事が始まり、フーコンの人達の歌や踊りもあり、集まった住民は大いに盛り上がった。ここで長橋将軍（中佐）が演説し締めくくった。この大会を境にしてフーコン地区の土侯全員が日本軍側に立つようになった。

● 日・緬挺身隊の結成

西挺身隊が信頼と尊敬を受けて、フーコン地区の治安を治めるようになってきたので、あるカチン土侯は長男と一人の若者を西隊長に預けるから、良い教育をして欲しいと申し込んできた。

そこで、この地区のビルマ青年達へビルマ独立のために、西挺身隊に入隊する募集を行った。この募集には、通訳の優秀な女性が大奮闘してくれたこともあった、多くのビルマ青年が競って応募してくれた。軍事訓練は号令など基礎から始め、各個に教練を主体に行った。彼らは飲み込みも早く、特に復唱を感心していた。これなら任務を間違えなくて済むと大いに納得した。

訓練しながら、斥候や伝令任務に日本兵を同行させたが、ジャングル育ちのシャン兵やカチン兵は勘が鋭く、目鼻は鋭敏であったり、カチン族は生まれつき戦闘的で精悍であった。

他方、ジャングル内には食料が豊富で、無限の山菜、バナナ、食用になる鳥類や動物がおり、川には魚が多量にいた。乾季だけ働いてコメを収穫すれば十分な食料を得ることができた。フーコンは未開のジャングルであったが、マインカンの村は、大密林の中に浮かんだ桃源郷であった。初期のころ、挺身隊のビルマ兵は彼らが作った「フーコン」の歌を歌って訓練や偵察に励むなどして比較的のどかな日が続いた。このようにして、日・緬の西挺身隊が結成され、拡充されていった。



日本軍の像輸送部隊

しかし、このような、のどかさは長続きせず、アラカン山脈の敵前進基地を出発した中国軍約100人が、シンプヤンに進入したとの情報をいち早く現地兵の偵察から受けた。たまたまニンビン付近を警備していた現地ビルマ兵は、東進してきた敵中国兵100陣を待ち伏せし、奇襲をかけて大損害を与えた。この時、鹵獲（ろかく）した英国製の兵器、弾薬が現地ビルマ兵の装備増強に大いに役立った。挺身隊の輸送に関しては像使いと像を重要な輸送班として協力してくれた。現地ビルマ兵は終戦の時まで無給で協力してくれた。

西挺身隊の偵察と戦闘

1943年（昭和18年）に入ったころ、米軍による反攻が開始され、西太平洋の日本軍の後退が始まり、連合艦隊の山本五十六長官がブーゲンビル島上空で戦死するなど、戦局は容易ならぬ事態になっていた。

当時のビルマ最前線はまだ日本軍が精強を誇っていた。このころになるとビルマ兵も訓練され150人くらいになっていた。将校のトップはボーソー・チーであり豪胆・

緻密で誠に優秀であった。下士官のトップは自動小銃が得意なボハン曹長であった。これらビルマ兵はその後も増加された。戦功者には褒賞としては阿片を少量づつ与えた。日本兵はビルマ語を話せるようになっていった。2月入ると英、インド、中国軍の動きが活発になってきた。

このころ西挺身隊の活躍を4月4日（日）付けの西日本新聞朝刊が次のように報道した。

【情けの宣撫に凱歌、敵の魔手から蘇ったフーコン】

印（インド）・緬（ビルマ）国境作戦

「西中尉の殊勲「〇〇部隊の先遣隊長として未開の処女地、フーコン地方へ敢然進出、敵の蠢動（しゅんどう）下にあつて、少数の部下と共にカチン族の宣撫工作に挺身、フーコン地方の土侯中11の土侯を皇軍に協力せしめ、今次北部印緬国境作戦に、重大な寄与を為した一中尉がある。西正義中尉（福岡県出身）がそれだ。…以下省略。同盟＝現共同通信」

西挺身隊は偵察に戦闘にこの魔境の地フーコンで縦横無尽の活躍をするが、紙面の都合でそれら活動の一部分のみの紹介に止めさせて頂く。

● 偵察活動

1943年3月～4月にかけて第18師団の一部はフーコン地区近在に蠢動する敵に対して西遊撃隊が入手した情報に基づいて計画された偵察と討伐戦を実施した。4月3日頃、西遊撃隊は敵前進基地から、米軍によるインドからビルマを経て中国に至るレド公路、自動車建設の進行状態を知る各種写真や軍用地図などを入手した。膨大な機械力と人力の投入、つまり、この公路の詳細な計画と実施状態を入手した。



レド公路

それらから判断すると、敵軍はこのフーコンの地からビルマ奪回、援蒋ルート再開、要するに彼我の主戦場になることを示すもので、その計画に愕然とさせられた。大変に重要な情報であるから、師団司令部に報告し、ビルマ軍司令部へ届けられた。これはビルマ戦線を左右する誠に重要な情報であった。

しかし、余談ながら、軍司令部の戦略眼はこの情報を重要視せず、自然の摂理を無視した無謀なインパール作戦を実施してしまった。その結果、ビルマ日本軍将兵30万人が悲惨な戦いを強いられ、約2/3の18万人の日本将兵が戦病死し、ビルマ日本軍の崩壊に繋がってしまった。

● 戦闘

1944年（昭和19年）6月中旬ころには、フーコンなどを守備していた第18師団（菊兵团）は十数倍の敵軍と交戦し撃破していたが、兵力消耗により徐々に退却してきた。西挺身隊はその退却を誘導したり、支援する任務を命じられていた。西挺身隊がサモウ、タウンに一地区を維持していたおり、敵大部隊が進出してきた。西挺身隊は日本兵20余人、ビルマ兵約100人は松野重砲中隊と第二師団野砲第4中隊の支援の下、タウンニー西側一帯の高地に進出した敵空挺部隊に猛反撃した。

西隊長を先頭にビルマ兵部隊は敵陣に突入した。見事に反撃は成功し、一気に敵を数千メートル後退させた。その後、敵の数次にわたる攻撃を阻止し、菊兵团が撤退するまでよく同地域を確保した。

7月上旬には、タウンニー西側山中に配置していた斥候から、駄馬を伴った有力な英インド軍が、我が陣地方面に接近中との報告を受けた。陣地には清松軍曹以下4人とビルマ兵7人、計11人が軽機関銃4丁と自動小銃を持って守備していた。

敵を引き付けるだけ引き付けておいて、一斉射撃すると敵の縦隊は忽ち大混乱になり、不意をつかれたためか、今来た道を算を乱して逃走した。中には森に隠れ反撃してきた者もいたが、しばらくすると退却してしまった。追撃すると彼らは自動小銃の一斉射撃をしてきたので、谷口軍曹とビルマ兵は地形を選んで激しい銃撃戦を展開した。一時間ばかりの戦闘であったが、遂に敵大部隊を撃退した。

この戦闘で日本兵2名とビルマ兵2名は負傷して衛生兵から手当を受けた。敵側の戦史によると、米軍スチルウェ中將は7月8日と17日、英・インド空挺第111旅団に西挺身隊が守備していた高地を占領するように命じた。西挺身隊はこれを防衛した。この戦闘で戦死したフランク・ブレイカー少佐に英軍ビクトリア十字章が授与された。このことでも、この攻防戦の激しさが伺われる。

7月中旬、西隊長と三苦軍曹以下日本兵4名とビルマ兵20人は陣地前高地偵察の為

に陣地を出発した。敵軍の軌跡を発見したので、緊張して前進していると敵軍と鉢合わせをした。西挺身隊の方が一瞬早く自動小銃を打った。敵はバタバタ倒れいく。一斉に逃げ出した敵軍は高地の上へ登ってしまった。挺身隊は路を下り敵の側面へ密かに回り込みジリジリ間合いを詰めていった。もう少しのところで敵に発見され、自動小銃の一斉射撃を受けた。余り接近していたので注意して手榴弾を投げた。数人の敵が負傷したようであった。夜が明けてきたので、皆で高地に上がってみると敵軍は向こう側の山に逃げていた。負傷した2人のビルマ兵の手当ても終了した。



日本兵の手榴弾攻撃

サモウ、タウンニー地区の攻防は毎日が戦闘の連続であった。西挺身隊は菊兵団や友軍重砲兵部隊、自動車部隊がこの地を撤退するまで守り通した。挺身隊の3ヶ月間における損害は戦死6名、負傷10数名をだしてしまっただが、大軍である敵軍に取り囲まれても、守りとおし、師団撤退という大局を生かすための捨て石になったが、最少の犠牲で耐え抜いた。

任務終了により平地に下りていくと、安兵団が陣地についていた。虚弱と言われていた安兵団の兵隊さんは心細くしていた。

山から下りてきた西挺身隊を何か不思議な物でも見るかのような呆然と眺めていた。これが噂の西挺身隊なのかと？

先頭の西隊長は軍刀を持たず、腰に手榴弾、小脇に英軍の自動小銃。下士官もみな自動小銃を持っている。ビルマ兵も、すべて英軍の兵器を持ち、服装はキリッとした日本軍服、しかも4人に一人は英軍の軽機関銃を担いでいる。貧弱な安兵団に比べると、凄まじく近代的な武装であった。ビルマ兵達は安兵団が見守る中で、大声で誇らしく西挺身隊の部隊歌を歌って行進したのであった。

【ニシキカン タトジマ タイカイ ピド ピヤンラダー 繰り返す。オーチョー
デ ルージ ドハエ テイカド ソシニーベーター 繰り返す。パーマドエー
ロッパエ タマド バー。】

【西機関の兵隊さんは、遠く国境で、戦って勝利を得て、凱旋してきた兵隊さんだ。
繰り返す。統率する部隊長は、天下無双の強者でビルマ兵も一緒に戦ってきた部
隊だ。繰り返す。ビルマに独立を与えた部隊なのだ。】

菊兵団の撤退により西挺身隊およびフーコン住民は徐々に撤退していった。カマイ
ンより南方カーサに来たとき、随行してきた多くのフーコン住民たちと別離の宴を
開いた。



ビルマの豎琴

フーコンで戦った敵軍がいなく、日本軍に協力した彼らに反感をもたなく信頼でき
るカーサの村長に避難民のことを頼んで、部落の仏塔でお祭りも行ない、村長に贈
り物もした。

彼らがフーコンから、この北ビルマの生活に慣れるまでの2～3年分の準備として
家屋、塩、食糧、医薬品などの生活必需品をインドウにある日本軍兵站基地から運
び込んだ。これらの準備に約一ヶ月間を費やした。そして別離の宴を開いた。

この別離の為に作られたと思う歌を合唱しながらゆっくりと何回も何回も踊った。
この哀愁を帯びた歌声と踊りには、日本兵も、ビルマ兵も、原住民もみんなが泣い
た。別れの宴を終えた明るる早朝、西挺身隊は、手を振るフーコン住民の中を次の
任務へ向かって、勇躍出発した。

その後、西挺身隊は日本軍の退却に伴って、マンダレー、タウンジー、モールメン
へ偵察に、戦闘に日本軍の先兵となり道を切り開いていった。紙面都合で省略する
が、西挺身隊は最後までビルマ兵とともに、斯くの如く大いに活躍したのである。

ビルマ兵との惜別

● 最後の任務

第33軍司令部はビルマ全土から撤退していた日本軍をモールメン（現モーラミヤイン）に集結させるため、タウンジーから山越えをするか、行軍が容易で最短距離であるシッタウン川越にするのか軍司令部で大論争になったが、結果は後者に決定した。しかし、戦車を伴う英・インド軍がシッタウンを押えておれば、相次ぐ激戦と長途の転進で戦力が衰え、傷病兵が多い日本軍は殲滅されるであろう。

第18師団（菊兵团）が敵軍よりいち早くシッタウンを占拠しなければならない。そこで師団長は西挺身隊（ビルマ兵40名含む）へ1945年（昭和20年）4月27日シッタウン河畔の偵察と出来れば確保を命じた。

西挺身隊は一部他隊の将兵と師団無線分隊を伴って、28日早朝タウンジー近郊を出発した。西隊長と佐藤軍曹とビルマ兵一個分隊はビルマ人のロンジー姿になって前を進んだ。出発して3時間くらいで、自動車道路に英軍グルカ兵がいたが、それを殲滅して先を進んだ。毎日小戦闘を繰り返しながら、5月5日、遂に目的のシッタウンに到着した。タウンジーの森から出発して8日間、僅かな睡眠で、夜を昼をついて戦い、南十字星を目指して、挺身隊は走りに、走った。

西隊長は【挺身隊はシッタウンに到着。敵は未だ渡河していないが、対岸まで来ている。一部の日本軍が守備についているが、兵力不足のため、至急援軍を要請する】と無線連絡とともに、確実な連絡のためにモン・テ・モンほか一名のビルマ兵を伝令として師団司令部へ向かわせた。

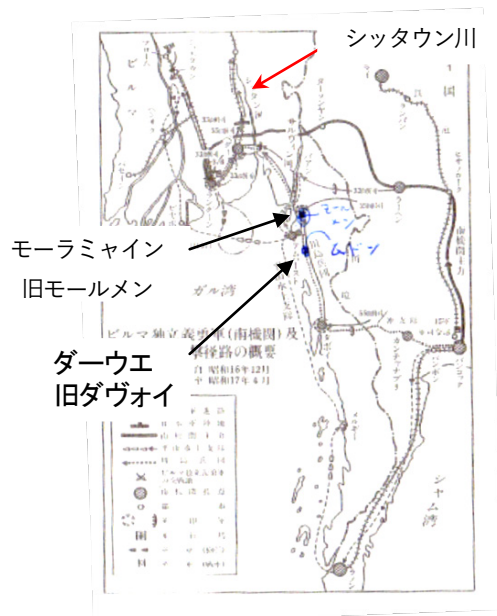
【この重大な任務を出来るだけ早く、確実に、この報告書を渡せ】と命じた。彼は「サンボウ」「サンボウ」と連呼して師団司令部に駆け込み木村参謀に手渡した。師団から、早速56連隊の相生大隊が急遽シッタウンに派遣され、河畔一帯を確実に占拠した。

また、モーラミヤインのビルマ訪緬軍司令部にも「シッタウンを確保した」と知らすべきと思い、佐藤軍曹ほか一名を急行させた。

- ① 挺身隊は5月5日にシッタウンに到着。
- ② 凡そ2日後には第18師団の先兵が到着見込み、引き続き主力が到着する予定。
- ③ シッタウン川付近に於ける彼我の情勢。
- ④ 野砲、山砲、その他の弾薬のシッタウンへの急送。

方面軍司令部はこの報告を大変に喜び、佐藤軍曹たちは手厚い待遇を受けた。挺身隊へはとっておきの清酒、たばこなどを土産にもらい、意気揚々とシッタウンに帰ってきた。

西挺身隊は危険を冒し、タウンジー東側からシッタウンまで300km、戦闘を繰り返しながら、僅か8日間で踏破し、第33軍ほか、西方ペグー山系に取り残されていた第28軍約3万人の救出をはかるなど、ビルマ全軍の崩壊を防ぐ役割を果たした。



● ビルマ兵との惜別

その後、西挺身隊はチャイト（チャイティーヨー山は有名なGolden Lock）に駐在し、住民への宣撫、渡河舟艇そのたの物資調達、河口及び海正面からの敵上陸企画の偵察その他の任務を師団から直接命令されていた。

西挺身隊は1945年（昭和20年）8月15日チャイトーでついに終戦を迎えた。日本将兵はこの重大ニュースに心は千々に乱れ、手に何も付かなかった。



西挺身隊の最終駐屯地、チャイト（チャイティーヨ山の Golden Lock）

しかし、ビルマ兵は全く動揺なく、「そんなに力を落とすな。今回は負けても、飛行機と戦車を持って、今一度ビルマにおいでよ」と日本兵を励ました。一般のビルマ住民も。日本軍に同情的で、増悪や軽蔑の様子は全くなかった。彼等は終戦で西挺身隊が解散し、西隊長が原隊の56連隊に復帰する前日まで行動を一緒にしてくれた。しかしついに別れの時がきた。

西隊長は持てるだけの貴重品や金品、自衛用として武器、弾薬も与えた。また、保管していた全ての阿片を彼らに与えた。阿片は何処に行っても高価に取引されるのである。

8月27日彼らを北ビルマの故郷に返す日が来た。いよいよ血肉分けたビルマ兵との惜別の日がきた。

西隊長は整列したビルマ兵を前にして言葉がつまってしまう。涙を押え型とおりの別れの挨拶をのべるのが精一杯であった。ビルマ兵は「隊長さんはじめ、皆様が無事に日本へ帰ることが出来ますように、仏様にお祈りいたします」と言ってから、隊長に最後の捧げ銃の敬礼をした。

“ボジゴー・アレッツ・ピュ”（隊長殿に捧げ銃）

どの目にも涙がいっぱいであった。居並ぶ日本兵たちもみな同じであった。振り返り、振り返り、彼らは去っていった。

戦後、日本へ帰還した西隊長はフーコン地区のメインカン土侯達及びビルマ兵の消息を必死に辿り、ようやく彼らと連絡がとれた。1987年（昭和62年）1月にヤンゴンで再会する予定と御自身の著作に記しておられた。

おわりに

戦争は人類が忌避すべき最悪の事件である。我々は世界の人達と手を携え全力を挙げて、この不幸な戦争を二度と再び発生させてはならない。しかし、過去に発生した悲惨な戦争から反省と学習を行うことも、また重要である。今回、この観点で上記の拙文を記述した次第である。

この【西挺身隊】は日（日本）・緬（ミャンマー）の兵士が死生を乗り越え、一糸乱れず最後の最後まで戦え得たのは如何なる理由からであろうか。



ラングーン元旦風景
【大東亞戦争画報】(第15号 1943(昭和18)年2月6日 毎日新聞社発行)

(日本兵と正月を共にするミャンマー市民)

西挺身隊の日本兵とビルマ兵は固い絆で結ばれて1945年8月15日の終戦まで、フーコンの地及び北ビルマからモールミヤインまで、ミャンマー民衆の支援と地の利を得るとともに、敵を知り己を知って、偵察に、攻撃に、また困難な防御にと縦横無尽に活躍し任務をまっとうしたのである。戦いは利に非ず、敗れたとはいえ、西挺身隊としては勝利者であったと思う。

この日・緬兵士の固い絆は一気につくられたのではなく、ビルマ独立と言う共通の目的もあったが、西中尉(隊長)および日本将兵が示した我が国の【公に奉じる節度ある言動(倫理観)】が彼の未開の地フーコンで示され、その繰り返しの実姿を見ていたビルマ兵及び現地の住民が徐々に信頼と尊敬を深めていった結果であると判断して過言でないと思う。

その証左は、もし、そうでなく、形ばかりの挺身隊であれば、日本兵とともにビルマ兵が身の犠牲も覚悟した戦闘に参加しなかったと思う。

御存知の通りアウンサンスーチー国家顧問が今年11月1日～11月5日まで来日された。我が国の安倍総理、岸田外務大臣などと会談され、その後、スーチー女史は真の友人である日本からの支援を感謝し、目下最大の課題である経済力増強のために、更なる日本からの経済支援を熱望された。一方、外交に関しては、民主化、人道問題に余り関与せず、また、東シナ海の覇権問題に触れず、中国も含めた全方位外交をとるとのミャンマーの方針を披歴された。

ミャンマーの歴史を多少知る私は現下ミャンマーの国策方針に二律背反的な困窮さは理解しているが、目下のミャンマーに於いて一部に些か気になる点を感じている。凡人以下の私が、これに対して意見を述べることは僭越ではあると思うが、同国の

友人として格別の御容赦を頂きたい。

つまり「武力を背景にした覇権主義」と「経済発展と公に奉ずる精神哲学」についてである。私の単なる杞憂あれば良いが、一応、下記にそれらに対する私見を述べさせて頂きたい。

如何なる国家と雖も、外交は自国第一に考えているのは当然の理である。

しかし、この21世紀は20世紀の反省から、武力を背景にした覇権を主目的にする国家は世界の条理に適合せず、その結果と末路は現在の世界紛争地の悲惨な様態を醸し出し、多くの人々を一層不幸の淵に追いやっている。世界社会はこれらを受け入れなくなりつつある。

従って、世界の条理に目を瞑って、この覇権などの軍門に降って一国の経済を再生することは自立した国家と言えず従属的な衛星国的になるのではなかろうか。

目下ミャンマーの最重要事は経済の再生であろうが、仮に他国から数兆円規模の支援を受けても、その経済支援を起爆剤にして、他国の手でミャンマーを発展してもらうのではなく、将来の国家ビジョンに基づき、ミャンマーの人々自らが自立して汗を流し国家国民の発展の為に時には自己犠牲をも厭わず本気で努力して初めて達成できるのである。

他方、国家の発展とは経済の発展だけでは成し得なく、国民の文化教育の発展こそが国家発展の骨格を担うと思う。そのためには、特に倫理哲学教育が必修である。

ミャンマーは不幸にして長期に亘る植民地とティンセイン大統領以前の軍政によって「公に奉ずる精神」が疲弊している。

従って、人材育成をしながら経済及びその他の改革行うべきであると考え。人なくして、国家国民の経済及び産業の発展はありえないと思う。仮に出来上がっても剥げたメッキにすぎないであろう。

幸いに私の知るミャンマー新政権のリーダー格の方々が以上の事柄を認識されているのはミャンマーにとって誠に幸運であり、喜ばしいことであるから、今後はそれをより明確な方針とされ実践されることを望んでいる次第です。

ミャンマーは国家の政体及び経済、産業などのシステムを一から造り直さねばならない。インフラも直ぐには構築できない。それ故、日本企業が進出しても、直ぐに事業展開をし難いのが現状である。

しかし、ミャンマーは識字率が比較的高く、一般的にモラルも低くなく、我が民族の血も些か流れている親日国であり、農水産、鉱物、ガス等の資源も豊富で、且つ、地政学的にも重要な国家である。

従って、平和と共生を外交方針に掲げている我が国は、ミャンマーの人々自らが自立して国家の再生と発展に取り組める支援をする中で両国が事業展開をはかり、それが我が国の国益（企業含む）に結びつくようにしなければならない。

この為には、我が国の世界戦略の中で、ミャンマーに対する有効な戦略を考え、それを可能な限りミャンマーと共有し、つまり、この戦略の中で定めている目的乃至目標を、両国が責任を持って達成するために共に活動し、双方がその結果を得て、これを通じて強い絆を築いていく。これこそが真の共生に他ならないと考える次第である。

【西挺身隊】の日本とビルマの将兵は、1945年8月15日終戦の最後まで死生を乗り越えてあの過酷な戦場で共に戦いを全うしたのである。この意味に於いて【西挺身隊】は誠に小さな小集団に過ぎなかったが、日・緬将兵が誠に固い絆で結ばれて、熾烈で酷烈な戦場に於ける活動の航跡は今後、我々がミャンマーを始め海外諸国との共生を如何に発展させるかの道標を示してくれていると思う。

今回の記述は西正義著「西機関・ビルマを征く」から少なからず引用したことを付記する。

2016年10月17日
高松重信

参考引用文献

- 西 正義著『西機関・ビルマを征く』1-378頁、サンエイプロス株式会社、1987年9月
- 八江正吾著『イラワジの誓い』1-267頁、昭和堂印刷、1967年10月
- 菊池重規著『中国ビルマ戦記』1-309頁、図書出版社、1961年6月
- 越智春海著『ビルマ最前線』1-286頁、図書出版社、1985年4月
- 川北恵造著『烈風』1-314頁、叢文社、1983年1月
- 野口省己著『回想ビルマ作戦』1-314頁、光人社、2000年1月

筆者略歴

たかまつしげのぶ

高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。

元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 4

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う
＜その3＞—日・緬（ミャンマー）連合の西挺身隊（カチン州）—

高松重信 著

2025年1月15日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-03-4 C1810

©高松重信 2025